

「ルカノール伯爵」(9)

—パトロニーオの書—

ドン・ファン・マヌエル
木原 太 源 訳

ルカノール伯爵とパトロニーオの書 第四部

ルカノール伯爵へのパトロニーオの弁明

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは言った。「度重なるご所望から、また、誠実なお気持ちからであることが解りましたので、平易な五十の教訓からなる第一の書中や、少々解し難いものがあるとは言え、非常に平易な百の格言からなる第二の書中で言及致しました数より幾分多めに述べるように務めました第三の書では、第一の書の五十の教訓あるいは第二の書の百の格言よりもやや難解な五十の格言を記しました。それ故、数々の教訓談や格言を合わせますとこれまでに二百に上る教訓談や格言を、実際はそれ以上を本書に記してきたことになりました。なぜなら、第一の書の五十の教訓談には、格言のみからなっております他の書と同じように、有益で役立つ格言が随所に見

出されるからであります。これら総ての教訓談や格言を銘記し活用する人なら誰にでも、魂の救済と財産や名声、名譽および地位の保全に十分役立ったであろうと明言致します。このようなことに役立つことがこれまで述べてまいりましたことの中に多々あると考えますので、もしももっともなことをなさりたければ、私を休息させていただかねばなりません」

「パトロニーオ」とルカノール伯爵は返答した。「すでに申したように、知識は非常に役立つものなので、可能な限り多くの知識を身に付けようと思っておる。それ故いかなる理由があろうと、出来る限り多数の知識を身に付けるのに全力を尽くすことを決して止めはしないつもりだ。お前に優る有識の者が見つからぬのは承知なので、能う限りのことをお前から学ぶために終生問い続けるであろう」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは言った。「仰せの通りでございます。しかもそれが殿のお考えでございますなら、その時のご理解の状況によりまして、これまでに申し上げなかつたことを多少述べることに致します。しかしながら、ここまでき言及してまいりましたことは平易なものであることは承知しておりますので、今後は幾分そうでないものをも織り交ぜながら述べることに致します。もし重ねて強くご所望なさいますなら、ご理解いただきますために、殿の知力を高めるにふさわしい方法でお話ししなければなりません」

「パトロニーオ」と伯爵は返答した。「予の執拗さを不快に

思い、このように申しておることは十分承知している。しかしながら、予の心もとない知力からすると、むしろあいまいによりも平明に語ってもらいたいものだ。とは申せ、お前に知識の伝授を差し控えられるより、思う存分望むがままに語ってもらうほうがよい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニオは返答した。「そうお望みでございますなら、これから申し上げますことに十分ご留意なさって下さい」

「かつては偉大なことに見えた多くのことも、時が経つと平凡なものとなる」

「人は皆自分の子供の振る舞いや力量および才能を誤解する」

「他人の間違ひは過大に、自らは過小に判断するのは浅慮なり」

「過信は見くびりを生ぜしむ」

「何人も自分の知識と他人のとの間に何らかの共通点があるのが分かるまでは心安くしてはいけない」

「他人が被っている不幸を目にする者は自分に降りかからぬよう用心しなければならぬ」

「人は知識をひけらかしてもいけないし、出し惜しみしてもいけない」

「健康や金銭に困らなかつた者はそのありがたみが分からぬい」

「邪心のある者や二枚舌を有する者を登用する君主は無分別

な振る舞いをする」

「賢者は威しや横柄な言葉ではなく、温和で甘美な賛辞で事に励む」

「中位の者はもとより上位の者との対立を避ける人は賢明である」

「賢者は悪人達を近づけてはいけない。さもないと彼らが賢者の意に従って悪行を行っていると人は思うであろうから」

「権力者と争う者は身を危険に曝すことになる。同等の力を有する者と争う者は不慮の出来事に見舞われる。下の者と争う者は軽蔑される。財産や名誉を損なわずに保てる者は最良なり」

「自らの見解に準拠する者は称賛されない。また、自らの考えに自信のない者は口の軽い者に隠し事を漏らす」

「揉め事も無く平穩無事であるよりも心配事が少しあるほうがよい」

「君主には氣力がとてもふさわしい。氣力に欠ける者はせめてたくましい身体を持ち主であるべきだ」

「非の打ち所がなく称賛を浴びる助言者は口が堅くて欲心のない賢明な者である」

「楽しみや喜びよりも利となることに思慮を巡らすほうが有益である」

「暴虐や浪費、酒色や快楽に溺れ、不正や非道に走り、敵を作って友を持たぬことにより所領あるいは命は失われる」

「たやすく許すことは周囲の者を厚かましくする」

「悲しみは御馳走を無味にするが、喜びは不味い食べ物を美味しくする」

「人知れずに長年の間復讐の手筈を整えるには思慮深さが不可欠である」

「愚か者が思慮ある者のように見せかけんとするは、時折思慮ある者が常軌を逸した振る舞いをしたがるのと同様に愚行である」

「長年の敵との戦いがどれほど困難であろうとも、自分自身との戦いほど困難なことはない」

「うつぶんを晴らそうとしたり、黙っておれなくなったり、あるいはよく考えもしないで口にする言葉は不正確である」

「仕上げに必要なものが欠けておることから、計画を実行に移さない者は賢明である」

「人には能力以上のことを頼んではいけない」

「長年ある特定のやり方で行動してきた者は将来も同じやり方で行動し続けるであろうと考えられる」

ルカノール伯爵とパトロニーオの書 第五部

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは言った。「これまで度々申し上げましたが、私は数多くの平易なあるいはそうでは

ない教訓談や格言を記述してまいりました。しかしながら、殿の度重なるご要望により、ここに最後の三十の格言を付言しなければなりません。その中には、殿が私や私の説明を受けた者からの解説なしにお解りになれば、私の驚きとなるほど難しい表現が若干ございます。しかしながら、殿にご承知おきいただきたいのは、あいまいで解釈し難く思えますこれらの表現をお解りになりますと、平易なものに劣らず役立つということでございます。本書には精緻にしてかつあいまいでありながら非常に簡約された多数の表現がありますので、ドン・ハイメの要望にお応えしたいとのドン・ファンの思いから、私はこれ以上教訓談や格言を記述したくはございません。そこで、別のさらに有益なことを述べてみたいと考えます。

伯爵様、心の問題は永遠のものであり、肉体のは廃れやすいものでありますから、心の問題が肉体のより優れておりかつ崇高であればあるほど、肉体は腐敗しやすく魂は永遠であります。ことから、魂は肉体よりさらに優れて崇高なのでございます。魂が肉体より崇高で優れており、優れているものは尊重され護られねばならないのであれば、魂は肉体よりも尊重され護られる必要はないと否定し得る者はございません。

魂が護られるには多くのことが必要であります。魂を護るということは魂の救済が達成されるような行為を行うことを意味するとお考え下さい。魂を護るということは城や櫃の中に魂をしまい込むというのではなく、魂が地獄に墮ちるような悪行を

行わないということでございます。魂を地獄へ堕ちないようにするには、地獄への道行きとなる悪行から魂を護るのがよろしいのでございます。

しかしながら、天国の栄光を得るには、人間は悪行から身を護るだけではなく、善行をなさねばならないことを承知しておかねばなりません。魂を護りかつ魂を天国の道へと導く善行には次の四つのことが必要なのでございます。第一は、人は信仰を持ち救いの教えに則して暮らすこと。第二は、分別のつく頃から総ての信仰箇条を素直に信じること。第三は、天国を得るよう善意による善行を行うこと。そして第四は、魂が地獄へ堕ちぬように悪行を行わぬよう気を付けること。

第一の、人は信仰を持ち救いの教えに則して暮らすこと、という件に関しましてはこのように申し上げておきます。救いの教えとはまさしくローマの聖母教会が教える普遍的な信仰でございます。殿は戸口の日向で糸を紡ぐ老女達が信じておりますように信じ下さい。彼女達はこのように信じているのでございます。神とは父と子と聖霊、つまり三つの位格にして唯一の神であること。そして、イエス・キリストは真の神であり真の人であることや、イエス・キリストは神の子であり、至福を得られた聖母マリアの胎内に聖霊として宿られたことも。その聖母マリアから神にして真の人がお生まれになったことや、聖母マリアは受胎された時も懐妊中もそして出産後も処女のままであったことなども。さらに、イエス・キリストは人として成育

されたのち教えを説かれたが、捕らわれると責苦を受けられ、その後十字架にかけられたことや、イエス・キリストは罪人を贖われるために自ら死を望まれたことや、死後地獄へ下られるとその到来を予知し待ち望んでいたイスラエルの民の族長達の魂を救い出されたことなども。そして三日目に蘇られると大勢の人の前に姿を現され、その後、現身のままで昇天されたことや、聖霊が堅信の秘跡をお授けになられ、しかも聖書のことを知らしめられた上、弁舌の才をお与えになった使徒達を送られたことや、彼らをこの世に聖書の教えを説くために送られたことなども。また、彼女達はこのようなことも信じております。イエス・キリストは教会の秘跡を現在あるとおりに定められた方であり、私達を裁きに來られることになっていることや、私達一人一人にふさわしいものをお与えになることも。そして、私達は蘇生するであろうことや、行いに応じて賞罰いずれかの報いを受けることになることなどでございます。

ルカノール伯爵様、こういったこと総ては、キリスト教徒が信じておりますように、そのとおりであるとご確信なさって下さい。知識や学問をほとんど身に付けていないキリスト教徒は聖母教会が教えるとおりに素直に信じておりますので、彼らはこの信念と信仰で救済されるのでございます。ところで、殿がその訳や、いかなる故でそうあらねばならないのか、またその理由をお知りになりたければ、『身分について』と題して著わしました書の中で、ドン・ファンが言葉と智力の限りを尽くし

て極めて詳細に表明しているのがお分かりになるでありません。その中で、キリスト教徒であれ、異教徒や異端者であれ、ユダヤ教徒やイスラム教徒であれ、何人であれ、この世は神によって創造されたのではないとか、神が必ずしも万物の創始者ではない、つまりこの世は神によって創造されたのではないなどと説明出来ないことが正當に証明されております。また、何故に、いかなる理由でイエス・キリストが真の人であらねばならなかったのか、そして何故に秘跡が聖教会が教える徳を有しているのかを私達に説明しております。また、人間は魂と肉体から成っていることや、魂は蘇る前に、肉体と共に行った善悪いづれかの行為により、それに応じた賞罰のいづれかを受けることになることや、死者の復活後、魂と肉体は共に行った善悪いづれかの行為に応じて、賞罰のいづれかを共に受けることになることも表明しております。

ルカノール伯爵様、あの書物の中でお見つけになるではありません、と申し上げましたことで、魂を救済するに必要な次の二つの大切なことについて言及しておきます。一つは、人間は救いの教えに従って信奉し暮らすこと。二つは、総ての信仰簡条を素直に信じることでございます。また、次の二つのことを、すなわち、魂を救済するにはどうすれば善行が行えるのか、あるいは、なぜ行われねばならないのか、また地獄の苦患を免れるにはどうすれば悪行を断つことができるのかについても前述書は詳細に述べてはおりますが、これを知ることとはとても必要

かつ有用でありますし、前述書ではなく本書をお読みになる方もおられるはずでございますから、ここでそのことについて言及したいと考えます。しかしながら、このことに関する必要なこと総てを申し上げることは当然不可能でございます。そこで、神が私に語らしめようと、また、その私の言葉を讀んだり読むのを耳にする人達に役立ち有益となるよう神が望んでおられますことを、私の拙い知識に基づいて申し上げることに致します。

しかしながらこの二つのこと、すなわち地獄の苦患を免れるには人はどうすれば悪行を断つことができるのか、なぜ天国の栄光を得るのに善行を行わねばならないのかについてお話しする前に、なぜ秘跡が本當にローマの聖教会が教えるとうりであるのかについて若干申し上げます。ここでこれについて触れますのは、ドン・ファンが著わした前述書ではこの点に関して詳細に語られていないからであります。

先ず初めに、神の肉体の秘跡、すなわち、祭壇に奉納されてあります聖体の秘跡について申し上げます。これは秘跡の中にあつて最も信じ難いものでありますので、私はこのことから始めることに致します。これが論理的に証明されますと、その他総ての秘跡が証明されることとなります。神の御加護を得てこれを立証致しました暁には、その他の秘跡も、キリスト教徒でなくとも知性や分別を有する者なら誰でも、正當に証明されていることが分かる方法で立証することに致します。その理由に

触れることはキリスト教徒には不要であるとはいえ、なぜならそれは真実であり、聖教会がそれを信じておりますので、彼らはそれを信じなければならぬからでありますし、キリスト教徒にはこれだけで十分だからですが、理由を知ることが妨げにはなりませんので、前述書では神は万物の創造者にして創始者であり万物によって作用されていないという、当然信じねばならないことをすでに論理的に証明されております。

また、神は人間を創造されましたがそれは神ご自身の意志によつてであり、自然に生み出されたのではないことが立証されております。その上、神は人間を魂と肉体、すなわち無体物であり永続する物体と有体物であり消滅する物体とから創造されたことや、魂と肉体の両者が賞罰いづれかを獲得するためには、神は神であると同時に人であるほうがよかつたといったことなどが前述書では詳細に表明されております。

ところで、イエス・キリストは昔も今も真の神であり、また神は全能であると証明されておりますので、何人も神が定められた秘跡には神が付与された徳が具わっていることを否定することはできないのでございます。しかしながら、誰かがこれは信仰にかかわることなので論理的に証明されるものだけを信仰したいと言えば、私は聖教会の諸聖人や博士達が提示された多数の道理に加えて、次のように申し上げます。

真実、真の神にして真の人であるわれらが主イエス・キリストが木曜日に弟子達と夕食を共にされた時、翌日自らの命を犠

牲にしななければならぬことや、この自己犠牲なくして人間が彼らの最初の祖先が犯した罪のために墮ちた悪魔の支配力から逃れられないのをお知りになると、受難の苦しみを受けることを望まれました。これにより地獄の辺土リンネにいる総ての聖人達は直ちに救済されました。イエス・キリストの自己犠牲なくして彼らは昇天できなかつたからでございます。ですから、聖教会の聖人や博士達は徳を具えてるのでございます。実際、天国での幸福や栄光はとても大きく、何人もイエス・キリストの受難や聖母マリアならびに諸聖人達の徳なくして得られないほどのものであります。このありがたくて益となる受難により、その時まで地獄の辺土リンネにいた総ての人々が救い出されましたし、聖なるカトリック教会の中でしかるべき人柄のまままで亡くなる人は総て救い出されるのであります。人として死なねばならず、またこの世に留まることができなかった上に、人間を救い出さねばならなかつた方であるイエス・キリストは、真の純真なキリスト教徒が救済されるよう、生前の完璧なお姿をわれわれのために残すことを望まれました。そこで、パンを取られると祝福されました。その後でちぎられるとそれを弟子達にお与えになり、次のように述べられました。「取って食べよ、これは私の肉体だから」それから杯をお取りになると神に感謝の言葉を述べられその後でこのように述べられました。「全員飲みなさい、これは私の血であるから」このようにして聖体の秘跡をお定めになりました。ところで、パンをお取りになると祝福

された後ちぎられたと言われております理由はこれでありませぬ。すなわち、イエス・キリストがパンを祝福されるたびに切れ味の鋭いナイフで切り分けたかのように均等にちぎられたことを殿にはお知りいただかねばなりません。これにより聖書はこう述べております。イエス・キリストの復活後、弟子達はパンのちぎり方でイエス・キリストを見分けたと。聖書がパンをちぎることに言及しなければならなかったのは、イエス・キリストのパンのちぎり方が他の人達とは異なるためではなく、常に不思議なほど均等にパンをちぎられたから記しているだけなのでございます。

また、この聖なる秘跡をイエス・キリストはご自身の形見として残されました。イエス・キリストは真の神であり、神は総てのものをお創りになりましたので、この秘跡をお創りになり定められたのは確かであることが証明されております。何人も定められたとおりにする必要はないとか、秘跡には真の神であるイエス・キリストが付加された徳は全くないなどと当然のように言うことはできません。

なおまた、洗礼に関してであります、良き分別ある人なら誰でもこの秘跡が定められねばならず、ぜひとも必要であったことを了解せねばなりません。結婚は神の命令により定められた秘跡の一つであるかもしれませんが、子孫を作る行為において、おそらく、必要であるとは定められていない快樂は避けられませんので、すでに生を得た者やこれから男女の交わりによ

り生を得るであろう者は総て、交合が行われた際の快樂の罪の痕跡をとどめて生まれることをご承知おき下さい。この罪を聖書は生まれながらの罪を意味する原罪と称しました。罪の身である人間は天国へ行くことができないものですから、神は慈悲をかけられこの罪を清める方法を定められました。このためにわれらが主なる神は最初（モーゼ）の律法で割礼を定められたのでございます。律法が効力のある間はこの秘跡は必ず行われましたが、もし洗礼の秘跡の利点をよくご覧になれば、律法に定められていることは総て私達が今信奉しております聖なる教えの表象のごときものであったことがお分かりになるであります。男子のみ割礼を施すことは別の方法で原罪を払拭することになる徴しるしのようなものであったからであります。男女がこの秘跡を必要とし、割礼は男子のみ行われたことをよくよくお分かり下さい。割礼による方法でしか何人も救われないのであれば、割礼が受けられない女子は原罪から解放されないのは当然です。ですから、割礼は、我らが主イエス・キリストが神としてその礎を築くことをお命じになられた聖なるカトリック信仰の中でお定めになられた浄化の表象であったことをご承知おき下さい。神がこの聖なる秘跡をお定めになりました時、自ら割礼の秘跡をお受けになって定めようと思われましたので、この戒律を廃止するためではなく実行するために来たのである、と述べられました。そして割礼で第一の戒律を、さらにご自身がお定めになった第二の戒律を、聖ホアン・バプティスタ

からお受けになったように、同人から洗礼をお受けになられた時に実行されました。

神がお定めになりました洗礼の秘跡がまさしく原罪を浄化するために定められていることがお解りになりますには、それをじっくりお考えいただければ、神がいかに正當にお定めになられたかがお解りになるでありません。

すでに、子孫をもうける行為において快樂は避けられないと前述致しました。ですから、このような快樂や身に帯びている汚れを浄化するのに最も清らかで、まさしく最適の手だてが用いられます。すなわち、たいていの物は汚れていると水で洗い清められるからであります。ですから、赤子に洗礼を施す時、『私は父と子と聖靈の御名においてお前に洗礼を施す』と唱えられてから、赤子は水の中に入れられるのでございます。殿、この聖なる秘跡がどれほど適切に定められているかお解り下さい。『私は父と子と聖靈の御名においてお前に洗礼を施す』と唱えられます時、三位一体の名を唱えることで父の力と子の知識と聖靈の優しさにおすがりし、神でありまた神の状態であるこの三つの位格によって、原罪を持ってこの世に生を受けた赤子は清められるのです。そして、この言葉は手だての一つである水に達しますと秘跡に変わります。イエス・キリストがお定めになりましたこの聖なる秘跡の制度は総ての人間に平等でありますから、男も女も受けることができますし、現に受けております。こういうわけで、この聖なる秘跡はなくてはならない

ものであり、制定されるに十分な理由があったればこそ、イエス・キリストはお定めになったのであります。そして、眞の神として制定することがおできになりましたので、何人も、この聖なる秘跡がローマの聖母教会が有しているのと同じものでも、また、同じように申し分のないものでもない、と断言できないであります。

その他五つの秘跡、告解、堅信、婚姻、叙階、終油のこれら一つ一つについては、ふさわしい言葉を尽くして申し上げますのでご理解いただけるであります。一つは、これ以上本書を引き延ばしたくございませんのと、もう一つは、殿やお聴きになる方ならごなたでもその一つ一つが全く正當に証明されることがお解りいただけるのを承知しているからでございます。

ところで、私にできます最良のやり方でこの問題を終えまして、再び次の二つの問題についてお話し致します。それは、人間が地獄の苦患を免れるために悪行を行わぬように、そして、天国の栄光を得るために務めて善行が行えたりまた行わばならないことについてでございます。

ルカノール伯爵様、すでに述べられておりますとおり、地獄の苦患を免れ天国の栄光を得るために行われねばならない総てのことを文書にすることは難しいものでございますが、簡単に説明することを望まれる方には、そのためにはただ善を行い悪を避けねばならない、と述べるだけでよろしいのでございます。

しかしながらそのとおりかも知れませんが、それは世間で言うところのほとんど内容のない言葉でございましょうから、以後はこの二つのことが行われ得る方法を事細かに申し上げたほうがよろしいのでございます。私は僭越にも自分の専門外である事柄や、浅薄な知識を越える事柄についてお話し致したからでございます。したがってこのように申し上げます。人間が天国の栄光を得るために行わねばならない行為は、第一に、神の救いの状態に浴している時に行わねばなりません。ところで、殿にご承知おきただかねばなりませんのは、神の救いを受けている状態とは人間が心から悔悛の状態にある時でございます。と申しますのは、総ての善行が心から悔い改めていない状態の時になされましても、それにより天国の栄光は得られないからであります。天国は、そこでの最高の至福は神を視ることでありますが、大罪ある身で得られるようなものでは全くございません。しかしながら、そのような状態でなされた善行が人間にもたらすのは速やかな悔悛の心であります。そしてこれこそが最大の恩恵であります。また、健康や名声や富やその他世俗の幸福といった現世の利益を得るのに手を貸してくれます。この至福を得た状態で人間が天国の栄光を得るためになさねばならない行為は、施し、断食、祈り、巡礼、そして慈善行為であります。しかしながら、このような善行で天国の栄光を得るには、次の三つの方法で行われねばなりません。一つは善行を、二つはそれをただしく、そして三つはそれを選び取ることによって

行うことであります。伯爵様、殿にはたやすくご理解いただけられるかもしれませんが、よりいっそう平易に述べることには致します。善行とは人間が神を求めて行う行為であります。それはただしく行われねばなりません。すなわち善意のもとに行われるのであって、見栄や偽善によってではなく、ただ素直に神に仕えるために行われねばならないのです。すなわち、なんらかの行為をなさねばならない時、それが善行であるのかどうかを熟考したうえで、そうであれば選取り、悪行あるいはすくなくとも善行ではないと判断される行為は差し控えることであります。このようにして善行を行っておりますと、天国の栄光を得るのに必要なことを行ふこととなります。しかしながら、見栄や偽善あるいは名を揚げるために行うならば、たとえその行為が善きものでありましても、ただしく行われたものでも、選取りによって行われたものでもございません。人知はそれが善行をなすのに不可欠であり最善にして公正な真の意図ではないことを十二分に承知しているからでございます。ですから、このように行う者にはカルカソーナの執事に起った事が生じるでありましょう。彼は死の間際に多数の善行を行ったのですが、それは真正正銘の善意による行為ではありませんでしたから、天国行きには役立たず、地獄へ墮ちてしまいました。この執事の一件についてお知りになりたければ、本書の第四十話の中で目にされるであります。

また、人間が地獄へ墮ちるような行為をしでかさないために

は、次の三つのことに留意しなければなりません。一つは悪行をしないこと、二つは悪意を込めて悪行をしないこと、そして三つは故意に悪行をしないことであります。行為自体が悪であったり、悪意を込めてなされたり、わざわざ悪いことであるのを承知のうえで行ったりするといったようなことでない限り、人間は完全に悪であるような行為をなすことはできません。この三つの事態がいっしょにならなければ決して悪行にはならないであります。また、たとえ行為そのものが悪であっても、悪意を込めたり、悪であるのを承知のうえで行われなかったならば決して悪くはないであります。善意を込めたり、善であるのを承知のうえで行われなければ、それ自体が善行にはならないのと同様に、行為そのものが悪であっても、悪意を込めたり、悪いと知ったうえで行われなかったならば決して悪行にはならないであります。善行はしたものの、善意から行った行為ではなかったがために、何の報いも得られなかったカルカソーナの執事の件を殿に例示致しましたが、さらに、不幸にも主君と実の父親を殺害したある騎士の例をお示し致します。彼は悪行を行ったのですが、悪意なしに、またしていることがわからずに行ったので、悪意を込めてやらなかったことから、何の罰も受けませんでした。この話は本書に記されておりませんので、これからお話し致しますが、執事の話は前述致しましたように、本書に記されてありますので申し上げます。

『ある騎士にはとても立派な盾持ちである息子がいたという

ことでございます。父親が起居を共にしております主君が盾持ちを自分の臣下にする事ができるような配慮をしなかったので、盾持ちは臣従する別の主君を探し求めねばなりません。盾持ちとしての能力と申し分ない臣従振りにより、瞬間に、彼は主君から騎士に叙されました。そのことでも立派な地位に就きました。ところが、世の中の出来事がそのままの状態が続くのはほんのわずかでありますことから、父親と息子が臣従する主君達の間に対立が生じ、その結果双方が戦をするまでに追い込まれました。

父と息子は別々の主君に仕えておりました。戦闘になりました時このような事が起きました。もう一人の騎士の父親である騎士が、戦いの最中に、ご主君の敵である自分の息子が起居を共にし臣従する主君と偶然に出会いました。相手を殺すか捕まえれば、ご主君にはこの上ない利となり、その令名はいや増すであろうと考え、勢いよく相手をつかんだところ、両者は地面に転がり落ちました。殺すか生け捕りにせんものと馬乗りになっておりますと、主君の供をしております息子の目に、地面に落下し父親に押さえつけられているご主君の姿が入りました。殿には彼の悲痛な思いが察せられます。ご主君に同情した彼は父親の名を呼ばわりながら、ご主君をお放し下さい。私は父上の息子ではありませんが、組み敷かれておられる主君の家庭でございますから、お放し下さらねば必ずお命をいただきます」と大声をあげて父親に訴えました。

ところが、彼の言葉が聞こえなかったのかあるいは聞き入れ
たくなかったのか、父親は息子の主君を放さなかったのでござ
います。父親に組み敷かれたまゝ危機に曝されているご主君を
目にした時、彼は忠義に目覚めると子の務めを忘れ去り、父親
に襲いかかりました。下馬をすればご主君の下へ駆けつけてお
命を救う間がないのを見て取ると、ご主君を放すよう大声をあ
げながら馬を駆けつけさせました。どうあってもご主君を放そ
うとしないのが分かりましたので、ご主君の有り様を見た時、
彼はすっかり心痛と怒りに心を奪われてしまい、父親に渾身の
力を込めてひと太刀浴びせました。すると剣は甲冑を纏った身
体をつき抜けました。ところが、この不幸なひと太刀はあまり
にも凄まじかったものですから、父親どころかご主君の甲と身
体をも貫きましたので、両者は息絶えてしまいました。

落命した主君の側で戦っておりました息子は、ご主君の死を
知る前に、すでに相手側の主君の命を奪っておりました。それ
故、この戦いは双方にとって非常に痛ましい結果となりました。
た。

戦いが終り騎士がご主君と父親の命を奪ってしまった不運を
知った時、諸国の国王や君主の城館へ両手を縛り首に縄を結え
たまま赴くと、出会った国王や君主達に、ご主君と父親を殺し
たかどにより不忠者としての死を受けるにふさわしい者である
ことを訴え、応報だと思われることをおやり下さいと要請しま
した。

〈続く〉